

長泉寺本堂とは？

長泉寺の現在の本堂は、困窮する戦後社会の中で、「命懸けで建てた本堂」と伝えられています(昭和34年築)。

戦後、岡山空襲によって家を無くされた家族5世帯が同居するなど、檀信徒の生命と信仰を支えた当時の本堂並びに客殿は、大変に傷みが激しく、建造物としては限界を迎えていました。そこで第23世住職秀禅師は、後継ぎの宥中師(第24世住職)とともに、昭和34年に本堂並びに客殿の全面改築を実施しました。

当時の長泉寺の資金力では到底できないと言われた伽藍整備でしたが、故・福原長蔵本堂建設委員長や、故・安達秀吉総代長のもと、多くの檀信徒の方々からお力添えをいただき、また、それでも足りない資金については境内の一部(約200坪)を売り払って賄うなどし、まさに必死の思いで成満されたと伝えられています。

秀禅宥中両師の念願だったその本堂並びに客殿の落慶式が昭和35年5月8日に奉修された後、両師とも力尽きたが如く昭和37年に遷化。跡は宥中師の長男秀昭師が継承。三男である光研師(現名誉住職)が若干18歳の時の出来事です。

なぜ修繕が必要なのか？

現本堂が建てられた昭和30年代、戦後復興段階にあった日本は全国的に建設資材が不足した時代でした。長泉寺本堂もその影響を受けており、24.6トンに及ぶ屋根を支える柱も、非常に細い材料が用いられています。したがって、上(屋根)が重く、それを支える下が弱い造りになってしまっており、そのため、例えば「南海トラフ地震」が起きた場合(岡山での予想最大震度は「6」)、震度5弱の地震で損傷、震度6強の地震では倒壊すると言われています(平成24年9月に耐震診断を実施)。

また、近年増加している豪雨時には雨漏りが発生し、このまま放置してしまうと破損や腐食に繋がる恐れがあるほか、本堂の真裏を走る山陽本線の影響で屋根瓦には鉄粉が付着しており、汚れも目立っている状態です。

現本堂を安全な状態で次世代に引き継いでいくためには、屋根部分を軽くし、それを支える下の部分を補強することが不可欠であることは言うまでもありません。また、その工事に併せて、古く傷んだ部分は修繕し、また、超高齢化社会に合わせて車イスの方でも本堂に上がって参拝できるように改良することも、信仰の対象である本堂の荘厳性とこれからの利便性という観点においてあって然るべきことであろうと考えており、皆さまのご理解とご協力を頂戴したく、深くお願いするところでございます。



赤褐色に汚れている屋根瓦



垂木の老朽化により波打っている状態の軒



破損している欄干



老朽化している回廊



雨漏りによって腐食している向拝部分



雨漏りによる天井面のシミ



雨漏りによって腐食している天井裏



細すぎる床下の材